

風紋

vol.55 2017 / Autumn

鳥取大学広報誌 FU-MON

特集

地域学の 新展開

成熟した地域学が、新たな息吹をもたらす



社会
貢献

鳥取県版 インフラ維持管理システムの構築を目指して

話題の
研究

農業を担う次世代のため、「スマート農機」を研究・開発しています

Student's
Voice

鳥大学生対談 インターンシップ参加学生編

学びを
支える

教育支援・国際交流推進機構
教員養成センター 教員養成部門

新任教員
紹介

医学部



やなぎはらくにみつ
地域学部 地域学科
国際地域文化コース 教授

関西大学第2文学部史学科卒業後、1987年フランス・パリ第4大学大学院歴史学科へ留学。1991年広島大学大学院文学研究科博士課程後期単位取得満期退学。1993年鳥取大学へ、2011年同大学地域学部教授。地域学部に創設から関わり、藤井学部長らと共にカリキュラム構築や教育研究に尽力。近年は、韓国、中国と鳥大の学生が互いの大学を行き来して学ぶ「キャンパスアジア構想」に力を注いでいる。

鳥取大学地域学部 学部長

藤井 正

鳥取大学地域学部 副学部長

柳原 邦光

▼藤井 昔は、地域に伝わる「生活の知
異分野と交わって一緒に考える
▼藤井 ミクロなものが地域だという
見方を変えていく意味がある。ズームイン・
ズームアウトを繰り返し、課題に応じて
考える力がこれからは必要ですから。
▼柳原 この10年育んできた地域学は
成熟し、地域社会では活性化活動の気運
が高まっている。地域学部はもう一段階上
にステップアップする時を迎えていますね。

▼藤井 「地域調査プロジェクト」「海外
フィールド演習」といった授業科目はもち
ろん、各ゼミで行う現場実習など、フィー
ルドワークを教育研究の一部に組み込み、
特色ある教育を行ってきましたよね。
それは、学生がぐんと成長するプロセス
となっています。
▼柳原 そうして知識やノウハウを蓄積
きた地域学を大前提にしなから、具体的
なフィールド、具体的な課題を定めて実践
しようとしています。しかも農学部や
工学部、医学部等、他の専門分野とも
深く関わり合っています。これこそが地域学の
次代のステージ。とても楽しみです。

▼藤井 学部創設から積み重ねてきた
ものが、今確信に変わっています。昨今、
国は「地方創生」の旗を掲げており、地域
学の分野は社会的に強く求められて
いますので、自信を持って進めていきたく
いですね。

平成16年、日本で初めての「地域学部」が
本学に設置された。当時まだ珍しかった
「地域学」の分野は、時代の変化に伴って、
今や大きく注目される存在となっている。
10年以上にわたり積み重ねてきたこれ
までの成果を追いながら、今年度1学科
3コースに改組生まれ変わった地域学部
の新たなチャレンジをご紹介します。



地域学の 新展開

成熟した地域学が、新たな息吹をもたらす

実践を積み重ね、多角的に成長

▼柳原 本学地域学部は全国に先駆け
て創設されましたが、カリキュラムの内容
は当初から、学術的な知識だけではなく、
実際に地域に出かけ、現場で活動して
いる人たちの経験から学ぶ、それが大き
な柱でした。

▼藤井 「地域調査プロジェクト」「海外
フィールド演習」といった授業科目はもち
ろん、各ゼミで行う現場実習など、フィー
ルドワークを教育研究の一部に組み込み、
特色ある教育を行ってきましたよね。
それは、学生がぐんと成長するプロセス
となっています。

▼藤井 だから最近では、地域への関心、
問題意識を持って入学してくる学生が
多いですね。そして、みんなフィールドに
出たくて仕方がない。自分でサークルを
つくって地域活性化活動へ飛び出していく
学生もいます。そういう活動が幾つも
出てきているのは大きな変化です。

▼柳原 海外の若者と関わる機会を増
やすことにも力を注いできました。東ア



ふじい ただし
地域学部 地域学科
地域創造コース 教授

京都大学大学院文学研究科人文地理学専攻
博士課程中退後、京都大学教養部助手を経て、
1988年大阪府立大学へ。2004年鳥取
大学地域学部教授に就任。2009～2014年、
同副学部長を務め、2015年より現職。専門
は都市圏研究。何より現場が好きで、「学生と
一緒に地域に出るのが一番楽しい」という。
地域と協働した学生の実践そのものが地域
貢献となるようなシステム構築を模索している。

海外の地域に目を向ける

「地域学」の、新しい領域へ

「インターローカル」。あまり聞き馴染みのない言葉です。3年ほど前から提唱されてきた造語ですが、ここには新しい概念が込められています。本学地域学部では、国内各地の地域的な課題に目を向けるだけではなく、海外のローカル(世界各地の人々の実生活等)に触れ、初めて体験して知る「地域学の新しい視点」を提供する機会をつくっています。その一つに「海外フィールド演習」があります。一步、海外に出てみて現地の実生活などを詳しく知ると、国内外の地域のこと、また自分のことについて新しい視点を持つことができず。それは、ナショナル(国家)の視点だけで見ているはなかなか気付くことができません。「国境の壁」を下げて物事を見ること、体験することが大切なのです。手に届く身近な海外体験こそが、学生のコアな発想と意識を高めていきます。そうして培ったインターローカルな思考を織り交ぜながら、新しい地域学を展開していきたいと考えています。

「インターローカル」はじめの一步

海外フィールド演習で世界各地の人々の実生活に触れてきた学生達に語っていただきました。

海外演習の参加動機は？

- ▶**依** 大学では教職の勉強をしています。海外、特に発展途上国の人々の生活に興味を持ったことです。
- ▶**渡辺** カナダへ1カ月間の語学留学をしたのですが「留学」の形式ではなく、もって現地で自由に活動できるこのプログラムに魅力を感じました。
- ▶**松崎** 私は日本史が好きなんです。でも日本のことばかり勉強してもダメだと思い、すぐに思い立ったのがアメリカでした。

現地で印象深かったことは？

- ▶**松崎** とにかくビックリしたのは食事です。お店のハンバーガーなど、

みんな大きくて味も濃い。日本で売られているハンバーガーは日本人向けに作られているんだなと思いましたね。

▶**渡辺** そう。何もかもデカイというか。ホットドックもそう。ジュースをスーパーに買いに行くとボトルに4ℓくらい入っていて、クッキーも円盤みたいなほど大きい。

▶**依** 私は滞在するホテルからバスに乗って農村地へ調査に通っていましたが、そのバスの中でベトナムの学生さんたちが「日本語を教えてください」と声をかけてくるんです。それに応えて私たちが「ベトナム語を教えてください」と頼んで、わいわいと和やかにお話できました(会話は英語を介してですが)。現地では、たまたま行われていた結婚式の食事にも招待されたり、夕食づくりの婦人が目の前でニワトリを絞めたりする場面にも遭遇して、日本では見ることが出来ない光景に接してハラハラしました。

▶**松崎** チャイナタウンとかジャパントウンがあり、アメリカとかカナダにはアジア系の人がこんなにたくさんいるんだということを初めて知りました。

ビックリ!初体験は？

- ▶**渡辺** 現地に行つて初日の夜、翌

日の朝食の買出しにスーパーに行くといきなりバーンという騒々しい音。銃声かと思身を伏せました。サンフランシスコでした。本当に怖かったです。あとで万引き事件と知りましたが、危険を肌で感じました。



現地の方との交流(ベトナム)

▶**依** トイレなんです!便器がないところがあつて、びつくり。下にあるのは排水溝だけ。でも、そこにするしかありません、よね。

▶**松崎** アメリカでもトイレの間仕切りの下の部分は大きく開いていて不安な気がしましたが、もって海外のことを知りたいと思いました。

演習に参加して思ったこと。

- ▶**依** 伝えたい思いを言葉と行動で示せば、伝わり合うことが分りました。
- ▶**渡辺** 言葉の壁を超えて、人と人が通じ合うことの大切さ。
- ▶**松崎** 今度は海外の博物館に行きたい。学芸員さんの勉強をしたいです。

つつい かずのぶ
筒井 一伸

地域学部 地域学科
地域創造コース 教授

たわら りりか
俵 梨々花さん

地域教育学科3年
訪問先 ベトナム

まつぎ はるみ
松崎 晴美さん

地域文化学科3年
訪問先 北米(米国・カナダ)

わたなべ たいしゅう
渡辺 大修さん

地域文化学科4年
訪問先 北米(米国・カナダ)

なか ともみ
中 朋美

地域学部 地域学科
国際地域文化コース 准教授

子どもの発達と未来を支援するプロジェクト



子どもみんなプロジェクトの組織図

全国10大学が参加 子どもの発達に向けて

学校や家庭・地域社会での子どもの教育や発達に関して、各大学ではさまざまな分野で研究や調査が行われています。そこで得られた多くの研究成果や知見を一つの場で共有し、教育委員会等の関係機関も参加して相互に「子どもや教育の問題」について連携して対応しようという3年前に始まったのが「子どもみんなプロジェクト」です。
本学地域学部には、附属学校(附属小・中学校)や各学部の協力のもとに全学的な「子どもの発達・学習研究センター」があり、ここが窓口となつてプロジェクトに参加しています。現在(平成29年)、プロジェクトに参加しているのは全国10大学。各大学とも、子どもの教育や発達研究を積極的に進めており、プロジェクト発足以前より互いに学術的な研究の連携を行うなど交流を深めてきました。



子どもみんなプロジェクト in 鳥取の様子

学校の教育現場では不登校や、いじめ、子どもの発達障害の対応など多くの課題に向き合っています。そうした中で、子どもみんなプロジェクトでは「子どものこころの発達」を「見統ける」「知る」「支える」という3点を重視して議論し、考察を深める機会をつくってきました。

教育現場と研究成果をもっと近づけたい

教育現場では、教員が子どもたちにとってどのように対応していけばよいのかと戸惑う場面が、たくさんあると思います。一方で大学には、そのような問題について

多くの研究がなされ、さまざまな知見をもっています。しかしその間、つまり教育現場と研究の間に隔たりがありはしないかどうか。であれば、その隔たりを埋め、どのようにつないでいくか、というテーマがプロジェクトの活動に向けられていると思います。
そこでプロジェクトでは各地で、多くの先生方や教育機関の関係者など招いて講演会やシンポジウムを開催してきました。(鳥取でも平成28、29年に開催)。そこでは小児科や精神科など医学系の先生も参加されます。「教育学」だけではありません。さまざまな分野から問題へのアプローチの見解が提示され、意見が交わされます。このプロジェクトが、教育現場と研究者が確実につながっていくためのプラットフォームになっていくことを願っています。

やなか ひさかず
谷中 久和
地域学部 地域学科
人間形成コース 講師



中山間地域の森林を生かし 持続可能な暮らしを取り戻す

若者による自伐型林業の復活

最近、日本の各地で林業に取り組み若者が増えてきているのをご存知ですか。杉のまちとして知られる鳥取県智頭町でも、自伐型林業を学び実践する団体「智頭ノ森ノ学ビ舎」が立ち上がり、故郷の森林を活用しながら、地元で生きる道を模索する若者たちがいます。

日本は、豊かな森林に恵まれた「森の国」です。町の90%以上が森林という智頭町のような中山間地域が数多くあり、そこでは林業家が木を伐り出し、また植



10月21日に開催された「智頭の福祉を考えるフォーラム」

林して山を育てるといふ、サステイナブル（持続可能）なコミュニティの仕組みが昔からありました。しかし、過疎・高齢化、生業・生活両面での疲弊によりそのサイクルは崩れてしまったのです。「智頭ノ森ノ学ビ舎」の取り組みは、それをもう一度見直す重要な挑戦です。そこで私たちは、智頭町をフィールドに、地域資源である森林を生かし自伐型林業を生業としながら多世代が互いにサポートしあつて豊かに暮らす、新しいコミュニティモデルの開発に取り組んでいます。

暮らしをバックアップする「サポートデザイン」がカギ

このプロジェクトでは、次のリサーチ・クエスチョンを設定しています。①生業（経済）と弱体化した集落機能（福祉）を同時に回復する方法、②中山間地域最大の資源「森林」を活かし地域特性をふまえた地場産業の創出、③中山間地域ならで



「智頭ノ森ノ学ビ舎」のメンバーと関係者

はの福祉のあり方、④地域の生活知（暗黙知）と大学の知（科学知）を統合した「ソーシャルな知」の創出、の4つです。

森林資源、生業技術・文化、教育・福祉、移住・空き家情報などは、広い意味での資源といえ、地域にあるそのような資源を住民相互の支えあいに活かしていくことが大切です。そのような支えあいがあるうしたら実現するかを考察するのが、サポートデザインです。言いかえると、「多世代共創」とは、「地域に必要なものはみんな支える（社会的共通資本）」ことを「地域支えあい（中間支援）」をつうじて達成することだといえるでしょう。

地球環境問題への貢献 ―フューチャー・ドライランド・プロジェクト―

地域学と乾燥地科学のコラボ

地域学は多彩な専門家の知を集結し、個々の地域の状況に対応した、きめ細やかな課題解決を得意としています。地域学のこれまでの経験をベースに、本学の長年の研究蓄積のある乾燥地科学と協働する取り組みがフューチャー・ドライランド・プロジェクト（以下、FD）です。平成25年に設置された鳥取大学国際乾燥地研究教育機構は、学長を機構長とし全学体制で乾燥地科学に貢献するためのプラットフォーム

モンゴルへの貢献

FDではモンゴルを研究対象とし、社会主義経済から市場主義への転換によって大きく変容したモンゴルで発生している



数千頭単位で飼育される家畜の過放牧



ウランバートル市内のゲル地区



ゲル地区に設置された上水供給施設「ウォーター・キオスク」



伝統的な遊牧民の住居・ゲル

さまざまな課題解決に貢献しようとしています。モンゴルと聞くと草原での伝統的な遊牧生活をイメージしますが、近年は首都ウランバートルへの人口集中による様々な都市問題や、社会主義時代の管理された遊牧からより利潤追求目的の過放牧、それを原因とした砂漠化による黄砂の発生など、日本にも影響する環境問題を抱えています。こうした複雑な問題を従来の乾燥地科学の成果で技術的に解決するのですが、モンゴルの制度や風習など尊重しなければならぬ事柄が多くあります。地域固有の状況に対応した地域学の課題解決の手法は、FDへ



やなか しげる
家中 茂

地域学部 地域学科
地域創造コース 教授

トランスディシプリナリー
（超学際的）な
専門家・実践者の力を結集

プロジェクトには、地域学部だけでなく農学部、工学部等も関わっています。また、智頭町はもちろん、林業・森業、生活支援サービス構築、ICT設計などの専門家・実践者が集結。日本の中山間地域が再び、持続可能な多世代共創社会として息を吹きかえすモデルづくりに励んでいます。



の貢献が大いに期待されています。

めざせ、フューチャー・アースの
トップランナー

FDは本学独自のプロジェクトですが、こうした地球環境問題への国際的な取り組みであるフューチャー・アース（FE）、平成27年に国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」とも関連しています。地域学をはじめとした本学の多様な知を集結し、さらに現地モンゴルの関係機関と連携しながら取り組みが始まっています。地域と連携しながら教育・研究を推進してきた地域学からの貢献で、FDが日本のFEの取り組みのトップランナーとなるべく奮闘しています。

やました ひろき
山下 博樹

地域学部 地域学科
地域創造コース 教授





社会貢献

くろだ たもつ
黒田 保 教授
 工学研究科社会基盤工学専攻
 土木工学講座

略歴
 1992年 鳥取大学大学院工学研究科修士課程土木工学専攻修了
 1992年 大阪セメント株式会社
 1993年 鳥取大学工学部 助手
 2007年 鳥取大学工学部 助教授
 2013年 鳥取大学大学院工学研究科 教授
専門 土木材料学/コンクリート工学



鳥取県版 インフラ維持管理システムの 構築を目指して

鳥取県が管理する社会インフラの維持管理業務を効率化することを目的として、内閣府の戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)「インフラ維持管理・更新・マネジメント技術」の研究助成を受けて、工学部の18名の教員と鳥取県との協働で鳥取県版インフラ維持管理システムの構築に取り組んでいます。この研究課題に携わるメンバーは、土木工学、社会システム工学、地震工学、情報工学、電気工学、機械工学など異分野の教員で構成されており、それぞれの専門分野の知を結集して研究課題に取り組んでいます。

社会インフラの現状

日本の道路橋や河川管理施設などの社会インフラは建設されてから長い年月が経過しているものが増えてきています。現在、道路橋は全国に約70万橋ありますが、今から15年後には建設されてから50年以上経過するものが橋梁全体のおよそ7割になると推計されています。その他、トンネル、河川管理施設、港湾岸壁なども今から15年後には半数を超えるものが建設から50年以上経過したのになると推計されています。

管理する社会インフラの維持管理を効率化するためのシステム開発(図2)を行っています。その個別の内容を以下に紹介いたします。

ICT(情報通信技術)を活用した点検業務の効率化

現在、鳥取県におけるインフラの点検業務では、現場で道路等のインフラの点検を行い、その結果を事務所を持ち帰ってデータベースに記録しています。これらの点検や補修履歴等の記録は別々のデータベースに記録されており、同じ内容の記録を重複して入力するなど煩雑なものとなっています。また、記録されたデータがインフラの維持管理に活用されることがほとんどない状況

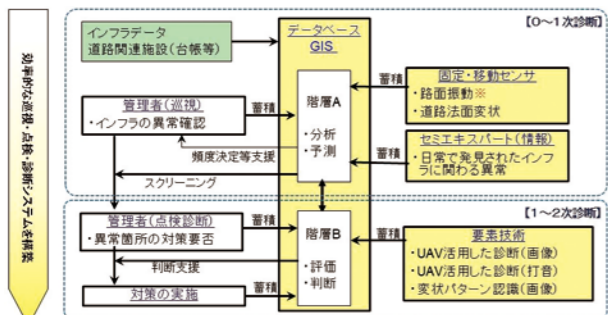


図2 鳥取県版維持管理システムの概念図



図3 情報発信システムの概念図



劣化したコンクリート橋(現在は補修済)

まず鳥取県で運用されている複数のデータベースを統合して一元化します。あわせて現場での点検の際にタブレット端末を利用して点検結果を記録(写真も含む)し、インターネットを介してそのデータをデータベースに送信するシステムを開発しています。このシステムを利用することにより、これまで事務所に戻って行っていたデータの入力作業を省略できます。また、GIS(地理情報システム)を活用して異常のあるインフラの位置を地図上に表示する仕組みも設けてインフラの状態を「見える化」するとともに、そのインフラのデータを表示できるようにします(図3)。この仕組みにより、管理者が常にインフラの状態を把握することができ、インフラの損傷や劣化の傾向を把握しやすくなることも、補修計画を

日常生活の中で道路等のインフラを利用している地域住民は、身の回りのインフラの状態を日常的に見ることができません。この地域の人たちの協力を得て、インフラの異常をいち早く通報してもらう仕組みを作っています。協力くださる地域の人たちにインフラの損傷や劣化などの知識を身につけていただくための研修を行い、その研修を受講した人たち(セミエキスパートと呼びます)に日常生活の中で発見したインフラの異常に関する情報(写真を含む)をスマートフォンなどの端末を利用して通報してもらいます。これを実行するために、研修のカリキュラムやスマートフォンなどの端末で通報する際のアプリを開発しています。セミエキスパートから通報された情報は地図上に表示され、管理者が閲覧することができます。この仕組みによりセミエキスパートから通報のあった異常箇所をいち早く確認でき、できるだけ損傷や劣化が軽微なうちに対処することができるようになります。このような予防保全的な対応により維持管理にかかるコストを削減したり重大事故を防止できる効果が期待されます。さらには、地域の人たちにインフラをより身近に感じ

す(図1)。一方、国土交通省の推計では、従来のやり方で社会インフラの維持管理・更新を行えば、今からおよそ20年後には維持管理・更新費が建設投資を上回り、多くの社会インフラが維持管理や更新を行えない状況になると考えられています。多くの社会インフラを抱える地方自治体では、予算が不足していることに加えて技術者が不足している状況の中で、今後も安全・安心な社会インフラを維持していくためには効率の良い維持管理の仕組みを作ることが重要であると考えます。私たちは、鳥取県が

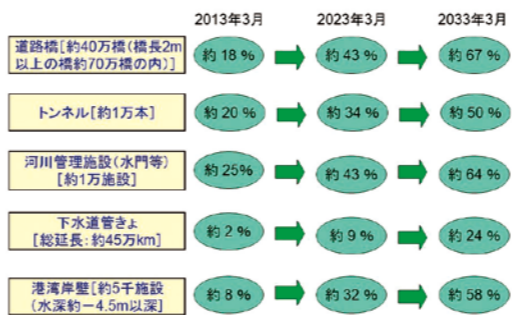


図1 建設後50年を経過する社会インフラの割合

最先端点検技術の活用

インフラ管理者の診断業務を支援するために、これから構築する維持管理システムに最先端の技術を導入します。点検で撮影された写真やセミエキスパートから送られてくる写真をパターン認識などの画像解析技術を利用して、対応が必要なものとそうでないものをスクリーニングする仕組みを開発します。これにより管理者の負担を減らすことができます。また、公的車両等に路面の異常を検出するセンサを搭載して走行し、日常的に道路の状態をモニタリングする技術を導入して日常的な点検業務を支援する仕組みを開発します。その他、ドローンや赤外線サーモグラフィ等の先端技術を取り入れて点検の効率化を図ります。

おわりに

以上のように、ICTなどの先端技術や地域住民の力を結集させて地方自治体におけるこれまでのインフラの維持管理を効率化するシステムの構築を目指しています。将来は、ここで開発する維持管理システムを鳥取県下の市町村にも広げて、鳥取県版インフラが安全・安心でより長持ちするものになることを期待しています。



農業を担う次世代のため、 「スマート農機」を 研究・開発しています

農家が減少していく中で日本の農業は、将来、どうなっていくのでしょうか。担い手農家に農地利用の集積化が進んでいくと、新たな課題も見えてきます。そこで私たちが研究しているのがセンシング技術を生かした「スマート農機・農業」の新展開です。

農地利用が集積する 担い手農家さんの声を受けて

約50ヘクタールの農地で稲作を手がける農家さんに、こう言われたことがありました。「いずれ10年以内に作付面積は今の倍の100ヘクタールを引き受けることになるかもしれない。けれども、その面積をまかなうとなると相当な負担がかかります」。つまり経営規模が大きくなっても、その分、作業労力と経済コストに見合うかどうかの不安も大きくなると

いう心配です。

そのような不安は、高齢化が進んで減少しつつある農家の現状と、一方で、いわゆる「担い手農家」に農地利用が集積していく中で、今後も必然的に起こっていくことでしょう。鳥取県内でも例外ではありません。このような現状を踏まえて、私たちの研究はこの先30年ほどを見通し、将来を担う今の若手農家(主に40歳以下の担い手農家)に向けて省力・高コストパフォーマンスを目指す「スマート農機・農業」を提案しています。



農作業をしながら同時に、 圃場環境をさまざまに計測する 田植機を開発

農地(圃場)は一筆(1区画)ごと、さらに一筆の中の各場所によっても土壌の質や肥沃度、乾湿(水はけの良し悪し)などの違いがあります。多くの農家さんは、その違いを長年の経験と勘のようなもので判断して土を耕したり、施肥などの作業を行っています。1年に1度しかできない稲作ですから過去の経験値を次世代に引き継ぐときには、世代間でなかなか共通理解を図りづらいたことがあります。私たちが取り組んでいる研究の一つは、

熟練の農家さんが蓄えている、これまでの「経験と勘」を生かし、さまざまな新しいセンシング装置などを活用して農作業の効率化、省力化を追求した新鋭の農機具の開発です。

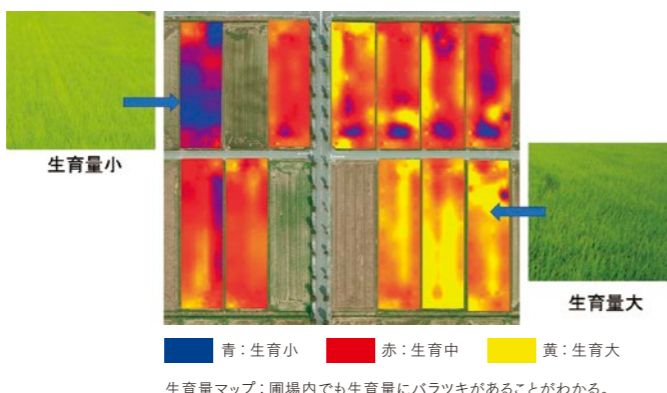
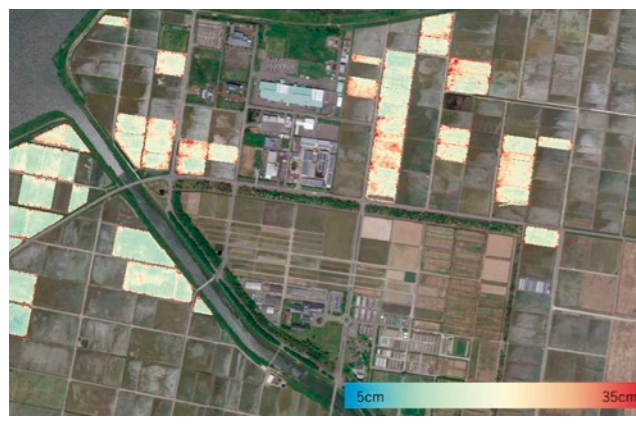
本学農学部は、総合科学技術・イノベーション会議(内閣府に設置)と連携した戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)に参画しており、その一環としてこのほど開発した「スマート田植機」(平成28年度・ロボット大賞優秀賞受賞)が一例です。

得られたデータを蓄積して、 将来の農作業の 効率化につなげていく

得られたセンシングデータとGPSを照合し、専用のタブレット端末で処理すると、各圃場の土質や肥沃度の違いが俯瞰的に見えるようになります。それを参考に施肥量を最適化して稲の生育ムラや倒伏を少なくすると、使用肥料の低減や作業効率がアップし、さらに作物の品質向上にもつながります。また集積したデータを蓄積していくとビッグデータとなり、次年度以後の作付け計画の貴重な参考資料となるでしょう。

私たちはほかにも「スマート追肥システム」を開発し、この夏に実証実験を行ったほか、稲の刈取りに使うコンバインについても倒伏状況や気象条件などに対応できる機械のシステムづくりを研究しています。

今後はAI(人工知能)の活用も考えられます。ですが私たちは、あくまでも



スマート追肥システム

農家さんが抱える現状の思いや課題を大切にして研究に取り組みたいですね。農家さんが機械に合わせて作業するのでなく、農家さんの思いやニーズにフレキシブルにえられるような農機を開発したいと思っています。



インターンシップには成長のカギがある！

理由・目的は人それぞれでいい
新しい世界へ一歩踏み出そう

▼主藤 僕はもともと教員志望だったけど、大学で過ごすうちに、自分が今勉強している内容を生かせるIT企業に興味を湧いてきました。そこでIT企業のインターンシップに申し込み、職場の雰囲気や仕事内容などを体験してみようと思ったんです。

▼榎本 私は1年生のとき、鳥取県中部にある三朝館という温泉旅館へ行きました。夏休みにインターンシップに参加した友達がいって、「すごく良かった」と言っていたから、

「私も行かなきゃ」と思って。地元就職を考えているので県内企業を選んだのですが、主藤さんはなぜLASSICさんに？

▼主藤 東京に集中している仕事を地方に移管して人を呼び戻し、地方を活性化させる取り組みを行っている。そこに興味を抱きました。

▼落合 僕がインターンシップに参加した理由は、二人とは全然違っていたな。僕は、工学部で行われている「鳥取大学フォーミュラプロジェクト(以下、TUFPL)」という活動をやっているんだけど、企業に支援をお願いに行ったり、リーダーとして

仲間をまとめたりする役割を担う中、何かしら自分のスキルアップを図りたかったから。そんなとき、1年生前期の「キャリア入門」の授業で鳥取砂丘砂の美術館のインターンシップのことを知って、工学とは全然関係ないけど、むしろ全く違う世界のほうがいいかもと思い、挑戦しました。

▼榎本 私も「地域就業論」の授業で、県内の受入企業が集まる「とっとりインターンシップ」の合同説明会のことを知りまして。会場では興味のある企業から直接話が聞けたから、すごく良かった。

▼主藤 へえ、そっなんだ。僕は最初、就職

いうことは関係ないでもんね。でも、旅館全体のことを把握しているわけじゃないからうまく答えられなくて。不安と緊張の連続でした。

実務体験で見えてくる将来の夢

▼落合 逆に、良かったことは？

▼榎本 私、鳥取県が「田舎」遊ぶところがない」というマイナスイメージを持たれていることに疑問を持っているんです。だから、県外の方が何を求めて鳥取県にいらっしゃっているのか、生の声を聞いて鳥取の新たな魅力を発見できたことが一番です。それから、「やっぱり人と接する仕事が好きだ」と再確認できたのも良かった。

▼落合 “人の立場に立つて考える”という接客業は、自分が思うより深いものでした。この経験を、TUFPLでいろんな企業の方とお話するときなどに活かしていきたいですね。

▼主藤 僕の場合は、「入社したい」と思えたことが良かったことです。実はインターンシップの後に採用試験を受けて、内定を頂いたのでよ。

▼落合 えっ、すごい！

▼主藤 インターンシップで「こんな感じの仕事なんだ」「こういう難しさがあるんだ」と体感できたのは大きかったですね。また、「社員の働き方」をすごく考えている会社で、職場の環境整備はもちろん、社員の意

見を取り入れてくれる体制があります。それって、企業説明会だけでは分からないんですよ。

何度行ってもおめになる 迷っている人にこそオススメ！

▼榎本 私は今年9月にもインターンシップに行きました。岡山県西粟倉村にあるゲストハウスなんですけど、その方が地域学部の授業に来られたとき、実施している取り組みのことをいろいろ話してくださいました。その考え方に感銘して、授業が終わった後「勉強に行かせてください！」と直談判したんですよ。

▼主藤 すごくいいですね！僕は一つ後悔していることがあります。僕がインターンシップを考えたのは、就職活動が始まるタイミングだったということ。結果として内定につなげたものの、「何でもっと早くに行かなかったのか」と。

▼落合 主藤さんの話を聞いて、インターンシップが就職に直結する場合もあるんだと知りました。僕も進みたい方向を早く決めて、榎本さんみたいにまたインターンシップに行きたいな。やってみたい業種がぼんやりしていても、体験することで定まるかもしれないし。うわ、なんか焦ってきた……。

▼榎本 就職先は私はまだ迷っているし、そんなに焦らなくても大丈夫！

▼一同 (笑)



情報ナビ会社経由で申し込みました。でも日程が合わなくて。そのことをキャリアセンターに相談したら、「とっとりインターンシップ」から申し込みれば調整してくれるかもしれないということで、実際に受け入れてもらえたんですよ。

社員の一人として責任を持って

▼落合 体験内容は、館内清掃やお客さまの誘導など。最終日には砂像作品のガイドもやりました。二人はどういうことをしたんですか？

▼主藤 毎朝決めるその日の「目標設定」が意外と難しかった。助言してもらったことを自分のものにするために「メモを取る」という目標を立てただけで、書き留めることに夢中になっちゃって。目標が抽象的すぎてうまくいかないし、いかに日頃そういうことを考えずに過ごしていたかを痛感しました。

▼落合 僕が苦労したのは、お客さまからの質問に的確に答えること。砂像や美術館のことだけでなく、「次はどの観光地に行ったらいい？」とか聞かれることがあるんです。ユニフォームを着ている以上僕もスタッフの一員。責任があるから間違ったことを言っていないといけないし、「一生懸命考えて接客していましたね。」

▼榎本 それ、私も一緒です。お客さまからしたら、私たちがインターンシップ生と

夕日に染まる湖山池が大好きです！

工学部 応用数理工学科 4年
すとう あきら
主藤 輝さん
長崎県対馬市出身

インターンシップ先/期間
「株式会社LASSIC」
2017年3月(5日間)
2006年創業、ITを駆使して地方を元気にする企業。鳥取の本社を拠点に、東京・大阪・福岡・岡山・岡山・広島などにオフィスを展開している。

学生フォーミュラのリーダーです！

工学部 機械物理系学科 2年
おちあい ゆうた
落合 勇太さん
岡山県岡山市出身

インターンシップ先/期間
「鳥取砂丘 砂の美術館」
2016年9月(5日間)
鳥取砂丘の一角に誕生した、世界初の砂像を専門に展示する美術館。「砂で世界旅行」をコンセプトに、毎年テーマをかえて砂像の展示を行っている。

鳥取県の活性化を目指しています♪

地域学部 地域政策学科 2年
えのもと かな
榎本 佳奈さん
鳥取県倉吉市出身

インターンシップ先/期間
「株式会社ラクコーポレーション」
2017年2月(5日間)
古い歴史と世界有数のラジウム含有量で有名な三朝温泉で、温泉旅館「三朝館」を運営。趣の異なる様々な庭園露天風呂があり、特にバラ風呂が有名。

平成29年4月から鳥取大学医学部 医学科脳神経医科学講座脳神経内科学分野の教授に就任いたしました。私は横浜市立大学医学部を卒業し、虎の門病院で初期研修を行いました。内科を色々回り興味引かれる科はあったものの、神経内科を専門として選び東京大学医学部神経内科に入局しました。私が神経内科を選んだのは、分からない病気が多く、謎めいていたからです。これから医師を長く続けるにあたり、分からないものが段々解明されていき、できればその一端を担えればやりがいを感じられると思います。それは正解であったと思っただけです。この20年で神経内科分野の診断技術は飛躍的であり、難病の原因も解明されてきて治療法の開発も進んできました。謎めいたところ

は大分少なくなってきたと思います。しかし、神経内科は、人間の脳から足く扱う科で、まだまだ解明されていないことが沢山残されています。私は神経内科の中でも神経の「機能」や「しくみ」を紐解いていこうとする神経生理を専門としています。脳の機能には学習や記憶など高度な働きも含まれており、まだまだ解明しつくされようにはありません。今勉強を始めた人でも飽きることはないであろうと思います。鳥取大学の神経内科は日本でも最も歴史がある科です。その伝統を生かして、これからの若い皆さんと一緒に、患者さんに寄り添いながら神経疾患の病態の解明や治療法の開発の一端を担っていただければと考えています。

神経内科の面白さを知ってもらいたい

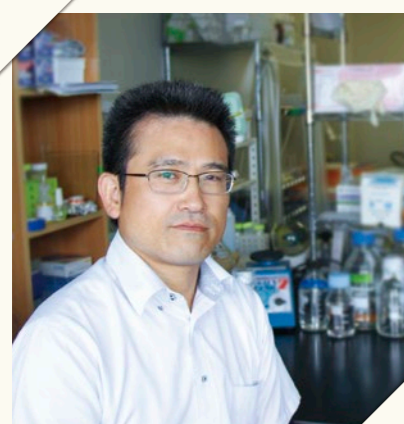


医学部医学科 脳神経医科学講座

はなじま りつこ
花島 律子 教授

略歴
1990年 横浜市立大学医学部卒業
1993年 東京大学医学部神経内科入局
1999年 同大学院医学系研究科脳神経医学専攻博士課程修了
2000年 カナダトロント大学トロントウエスタン病院留学
2014年 北里大学医学部神経内科 講師
2017年 現職

専門 神経内科 / 神経生理学
趣味 読書 / 旅行 / 映画鑑賞



医学系研究科 機能再生医科学専攻

つちや ひろあき
土谷 博之 准教授

略歴
2005年 北海道大学大学院薬学専攻修了
2005年 鳥取大学大学院医学系研究科 助教
2010年 京都薬科大学薬学部 講師
2012年 ユタ大学医学部 Research Scholar
2014年 大阪大学大学院薬学専攻 特任助教
2016年 現職

専門 分子生物学 / 生化学
趣味 植物の世話

創薬を目指したライフサイエンス研究

平成28年8月に医学系研究科遺伝子医療学部門に着任しました。実は約7年前にも、鳥取大学大学院医学系研究科で5年間勤務させて頂いておられ、今回久しぶりに米子に戻れる機会を得ることができました。当初は鳥取と鳥根の位置もあやふやで、米子市なのに鳥取県というだけで砂丘を連想してしまっていた私でしたが、今では豊かな自然に囲まれた山陰の生活をとても満喫しています。

私の専門は肝疾患、特に肝がんに関する基礎研究であり、その発がんメカニズムを詳細に解明することによって、新規肝がん治療薬を開発することを目標として研究に取り組んでいます。

肝がんは、B型やC型肝炎ウイルスに代表されるウイルス性の肝がんだけでなく、アルコールの過剰摂取や過

平成28年8月に医学系研究科遺伝子医療学部門に着任しました。実は約7年前にも、鳥取大学大学院医学系研究科で5年間勤務させて頂いておられ、今回久しぶりに米子に戻れる機会を得ることができました。当初は鳥取と鳥根の位置もあやふやで、米子市なのに鳥取県というだけで砂丘を連想してしまっていた私でしたが、今では豊かな自然に囲まれた山陰の生活をとても満喫しています。

私の専門は肝疾患、特に肝がんに関する基礎研究であり、その発がんメカニズムを詳細に解明することによって、新規肝がん治療薬を開発することを目標として研究に取り組んでいます。

肝がんは、B型やC型肝炎ウイルスに代表されるウイルス性の肝がんだけでなく、アルコールの過剰摂取や過

栄養などによる非ウイルス性の肝がんも存在し、患者さんごとに肝がん発症過程が異なります。さらにより詳細に分子レベルでみた肝がん発症メカニズムは多岐にわたります。また肝がんの有効とされる抗がん剤は1種類しかありません。

これまでのがん治療薬の選択基準は、このがんならこの薬と、悪くいえば紋切り型ともいえるものでした。しかし現在は、個々の患者さんごとに原因となるメカニズムを明らかにした上で、適切な治療を選択する考え方が主流になりつつあります。そこで我々は、肝がん発症メカニズムを一つ一つ明らかにし、肝疾患で苦しんでいる患者さんにも一つでも多くの治療選択肢を提示できるように、日々研究を進めています。

教育支援・国際交流推進機構 教員養成センター 教員養成部門

わたしたちは、「教員になりたい」想いの実現に向けて、みなさんを支援しています。



教育支援・国際交流推進機構 教員養成センター 教員養成部門
おたに ただし
大谷 直史 准教授

略歴
1993年 北海道大学教育学部卒業
2001年 同大教育学研究科博士後期課程単位取得退学
2001年 鳥取大学地域教育科学部 講師
2005年 同大生涯教育総合センター 助教
2013年 現職

専門 社会教育学 / 環境教育学
趣味 ボードゲーム / 廃墟巡り / 子どもの居場所づくり

教員に求められる力をつける

鳥取大学では毎年百名以上の学生が、教員免許状を取得します。教員養成センターでは3名の専任教員と1名の特任教員を核として、教員を目指す学生を支援しています。

教員はあこがれの職業であり、やりがいが多い職業である一方、大変な仕事の一つとしても有名です。長時間労働もさることながら、求められる能力が多様なおかつ深いことが理由でしょう。幅広い知識と教養に基づいて、同僚や保護者、地域の人々と協力・連携し、子どもの個性を捉えて活かす。格差社会の中で平等に、なおかつ質の高い教育を行うことが求められています。

こうした力を身に付けるため、個別の相談から各種学習会の実施、教員免許状取得を計画的に行うためのポートフォリオ作成支援や試験対策まで途切れること

鳥取大学で教員を目指す

鳥取大学には4つの附属学校園(幼稚園、小学校、中学校、特別支援学校)があります。連携して有用な教育実習を行えるのはもちろん、身近に様々な学校があるメリットも大きく、幼小、小中の接続や特別な支援を要する児童・生徒への対応など、近隣の学校を含め、ボランティア活動などを通じて身に付けることができます。そうした課外活動の効果を明らかにすることが目下の当センターの研究課題で、学生の皆さんとともに考え実践しています。

就活日記

なかじま しずか
中島 静さん 農学研究科
フィールド生産科学専攻
2018年3月修了予定



内定先：三井物産株式会社

私が就職活動を始めたのは2月初めでした。キャリアセンターでは、質問を正確に読み取る大事さを教えていただきました。そして、就職活動を振り返り、常に自分に正直で勇敢な姿勢を持つことが重要だと実感しています。自分が将来どんな人になりたいのか、どこでなにをしたいのかをじっくり考える時間は必要です。

また、大学名や研究内容に捉われず、魅力を感じた企業にできる限り挑戦し、どんな状況になっても自分にできることにコツコツと取り組みながら前進し続けることが成功の鍵です。幾度となく様々な選択を迫られますが、どんなときも最後に決めるのは自分であり、そのときには自分の気持ちに嘘をつかないでほしいと思います。自分のことは実は自分が一番よくわかっていると思うので、その時々気持ちや考えに素直でいてください。

皆さんには就職活動を終えられるまで自分と真摯に向き合いながら取り組んでほしいと思います。応援しています。

いのうえ なほ
井上 菜穂 准教授
教育支援・国際交流推進機構
学生支援センター 学生相談部門

大学生生活色々あります

学生支援センターでは今年度より、大学生のためのソーシャルスキル・トレーニング講座を開催しています。ソーシャルスキル・トレーニングは社会で必要となる社会的スキルを学ぶ場です。鳥取大学では、「大学生生活支援のためのグループ(主に1年～2年生対象)」「コミュニケーションスキル獲得のためのグループ(全学年対象)」「キャリア支援のためのグループ(主に3年生、4年生対象)」の3つのグループを設置して、約半年間かけて各グループで目標としているソーシャルスキルを学んでいきます。

大学生になると、高校のときまでとは生活環境や授業形態が大きく変化します。家事と学校生活の両立、時間割作成や履修登録、試験やレポートなど、大学入学後に戸惑う学生が多くみられます。様々な壁に直面しながら頑張っている学生が、就職に向けての意思決定、さらには就職をしてから必要となるスキルを獲得することを目指したいと考えています。

大学院工学研究科創設以来 最高齢の博士誕生

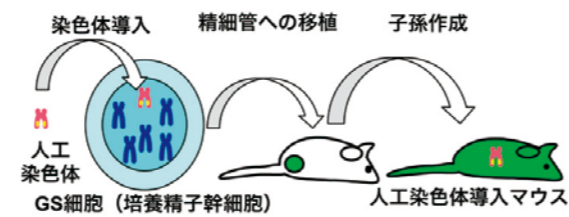
2017.9.25



入江善博さんは、株式会社入江産業の社長として活動する傍ら、工学研究科情報エレクトロニクス専攻岸田悟教授の指導のもと研究に励み、このたび工学研究科始まって以来最高齢となる73歳で博士(工学)の学位を取得しました。入江さんは修了に際し「気持ちはまだ50代です。若い人にはまだまだ負けないし、10年20年後も現役のつもりです。鳥取大学で研究した成果を活かした製品を作っていきたい。今後も何か新しいことを始めていきたい」と今後の意気込みを語り、若い学生らに向けて「とにかくトップを目指して勉強して欲しい。自分の目標を持って勉学に励めば、より充実した大学生活になるはず」とメッセージを贈りました。

精子幹細胞を使った 人工染色体導入マウスの作成に成功

2017.9.22



香月康宏 鳥取大学染色体工学研究センター准教授、篠原隆司 京都大学大学院医学研究科教授、小倉 惇郎 理化学研究所バイオリソースセンター室長、鈴木 輝彦 東京都医学総合研究所主席研究員らの研究グループは、精子幹細胞への人工染色体導入法を開発し、人工染色体導入マウスの作成に成功しました。これまで一般的に用いられてきた受精卵やES細胞を用いた染色体導入に比べ、培養中の染色体異常が起きにくく、染色体導入マウスを効率的に作成することができます。ヒトの疾患を再現したモデル動物作成や、男性不妊症の発生メカニズムの理解や新たな治療法の開発に役立つと期待されます。論文は9月22日、米国の科学誌「Stem Cell Reports」に掲載されました。

抗うつ効果をもつ新たな物質発見を発表

2017.8.21



医学部精神行動医学分野の兼子幸一教授、岩田正明准教授、山梨豪彦助教らのグループは、人の体内でつくられる「βヒドロキ酪酸(BHB)」に抗うつ作用があることを明らかにし、記者発表を行いました。また、BHBはストレスを受けた際に脳内で産生される炎症促進性物質の上昇を抑えることも見出しました。今回の発見はこれまでとは全く異なる作用機序でうつ病の予防・治療を目指すものです。難治性うつ病と言われる患者さんの中には体内の炎症性物質が高いと言われており、従来の抗うつ薬で改善を認めない患者さんへの効果が期待されます。BHBは様々な方法で生体内でも産生量を増やすことができます。今後はBHBによる新たなうつ病治療薬の開発が期待されます。



WHAT'S NEW?



大学の動き

在学生の活躍や大学の取り組みなど、
鳥取大学の最新情報をご紹介します。

医学部錦祭でOB講演会を開催

2017.10.29



医学部大学祭『錦祭』で同窓生を講師とした講演会が開催されました。講師には本学医学部を卒業し、テレビ番組にも出演されるなど総合診療のスペシャリストとして全国的に活躍されている、千葉大学医学部附属病院副院長(総合診療科長)の生坂政臣氏をお招きし、『病名をつきとめろ! 「鳥大版ドクターG」-総合診療(医)の大切さ-』として実施しました。講演では、正しい病名が分かるまでに幾つもの専門医の診察を受けることとなった自身の過去の体験が総合診療の道に進むきっかけとなったことを語るとともに、番組さながらに、回答者となった医学部学生3人を相手に症例を提示、正診へと導きながら、軽妙なやりとりを交えて、会場を沸かせていました。

地域価値創造研究教育機構が発足

2017.10.2



10月から発足した鳥取大学地域価値創造研究教育機構の開所式をコミュニティ・デザイン・ラボ(広報センター内に新設)にて開催しました。

この機構は、常に地域に寄り添い、教育研究の成果を地域に還元してきた鳥取大学の伝統に則り、地元地域が直面している人口減少や産業空洞化などの解決に役立つ研究開発や人材育成に、地域の様々な方々と一緒になって、全学挙げて取り組むための中核組織として設置されたものです。法橋機構長から「地域の皆さんと協働で進める地域参加型研究と、地域課題の解決策を実践的に学習する地域実践型教育を融合的に推進していく」という運営方針が説明され、関係者一同、希望と決意を新たにしました。

JSBC2017で3度目の総合優勝

2017.9.1



8月31日から9月1日に岐阜大学で開催されたJapan Steel Bridge Competition 2017(日本鋼橋模型製作コンペ)で工学部の学生チームが総合部門優勝の成績を収めました。2014年、2015年の優勝に続いて今回3度目の優勝。大会には、全国の大学・高専から21チームが参加し、「構造」・「架設」・「美観」の3つの部門で競い合いました。本学チームは、学部生及び大学院生計6名で結成され、4月から構造計算や橋梁形状の決定、詳細設計や製図を行い、学内の実習工場で橋梁部材の加工・製作、本番に向けて架設練習を行うなど大会に向けて取り組みました。「軽く・早く・強く」の3つをコンセプトに掲げて様々な工夫を行い、構造部門優勝、架設部門第2位で総合部門優勝を収めました。

鳥取砂丘除草ボランティアに参加

2017.8.30



鳥取砂丘では近年外来種の雑草が繁茂し、砂の移動が減少することにより、美しい「風紋」や「砂簾」が見られにくくなるなど、砂丘の草原化が深刻な問題となっています。鳥取砂丘景観保全協議会が県民に呼びかけて平成16年度から始めたもので、本学もこの事業の趣旨に賛同し、雑草が発芽・成長する夏の後半の時期に毎年度参加しています。

今回は本学の学生及び教職員約260名が集まり、夕方から除草を開始しました。

除草ボランティアに参加した学生からは「鳥取県の宝である鳥取砂丘を守りたくて参加した」「若い学生の力で地域に貢献できてよかった」などの感想が聞かれました。作業を終えた参加者らは、すがすがしい気持ちで砂丘を後にしました。

大学からのお知らせ

INFORMATION



バーチャル キャンパス を開設!

鳥取大学の施設や講義室など、360度パノラマビューにより、どこにいてもキャンパス内にいるかのような臨場体験ができます!

鳥取キャンパス24カ所、米子キャンパス12カ所 全36カ所導入!



米子地区はこちらから!

<https://flic360make.vr360-view.com/tour/f07fda7bc64c177>



鳥取地区はこちらから!

<https://flic360make.vr360-view.com/tour/21b47c4d5f8ae9>

いつもご愛読いただきまして、誠にありがとうございます。本号の特集は「地域学の新展開」。今年から新しくなった地域学部では、他分野とも関わり合いながら展開されている新しいプロジェクトをご紹介します。対談の言葉にあったように、大学という枠を超えて皆で一緒に考えることが可能になったのは、行政や企業、地域の方々とこれまで積み重ねてきた関係のおかげです。

こうした土台は、教育にも生かされています。地域の現場において学ぶ「地域フィールド演習」、専門間をまたいだ「合同ゼミ」「融合ラボ」など、異分野や地域とともに考えることができる実践科目が設けられています。

今回の「学生対談」は、インターンシップ参加生たちによるものです。「キャリア入門」や「地域就業論」の授業をきっかけに、必ずしも専門ではない分野の世界を体験した彼らの対話にご注目ください。大学全体でも他分野や地域を意識する人々が増えています。

(H・I)



Circle Activities

卓球部は現在、1年生12人と2年生13人の計25人で日々練習に励んでいます。部員全員で行う練習が週に2回ありますが、部員によっては他の日にも自主的に活動しています。

春、夏それぞれに開催される学生リーグ、冬の新人戦、9月にある中国五大学の国立大学五校が参加する中国五大学学生競技大会などに参加しています。また毎年11月には鳥取大学卓球部主催で近県硬式卓球会を行っています。近県硬式卓球大会は、試合への参加以外に、主催者としてトーナメントの組み合わせを早い時期から行ったり、試合運営において臨機応変に対応したりと、男女合わせて40チーム以上集まる大きな大会なので、とても



主将 ふじわら なおや 藤原 直哉さん 農学部 生物資源環境学科2年	主将 かわはら あき 河原 亜季さん 地域学部 地域教育学科2年
--	--

サークル紹介
卓球部



目標に向かって日々練習中!

卓球は、プレイスタイル(戦型)や球の打ち方にプレイヤーの個性が出るスポーツです。対戦相手によって戦型が変化したり、人によって試合中の一点の取り方が異なるので、対戦相手のベースに翻弄されないための精神面が重要となります。しかし、人によって違う戦型を見られることが卓球の面白さでもあります。

現在、中国学生卓球連盟で男子は2部リーグ、女子は1部リーグに在籍しています。これからも、他大学との戦力差を付けられないように頑張りたいです。

※サークル紹介記事は学生広報スタッフが担当しました。

Congratulations

学生たちの活躍をご紹介します!



初入賞!

鳥取大学漕艇部が
全日本大学選手権大会で
初入賞!

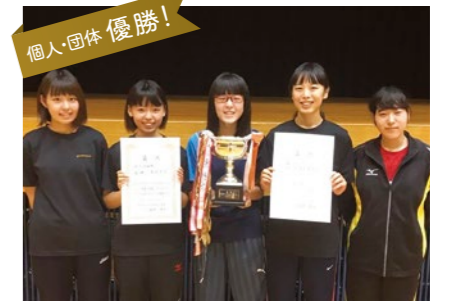
8月31日~9月3日、埼玉県戸田ボートコースで開催された第44回全日本大学選手権大会の男子ダブルスルカにおいて、本学の漕艇部佐藤 良祐さん(農学部生物資源環境学科4年生)、池田 康馬さん(地域学部地域環境学科3年生)が、見事、7位入賞を果たしました。鳥取大学の入賞は、創部以来初となり、漕艇部創部50周年を飾る快挙となりました。



初優勝!

体育会体操競技部が
中国五大学学生競技大会で
初優勝!

9月2日、3日、第68回中国五大学学生競技大会「体操の部」が山口県の維新百年記念公園体育館で開催され、本学の男子体操競技部が団体・個人ともに初優勝しました。同部は強豪校との接戦を制し、創部25年目にして初の快挙を成し遂げました。



個人・団体優勝!

体育会卓球部女子が
中国五大学学生競技大会で
個人・団体優勝!

9月7日、8日に鳥取県立産業体育館で行われた第68回中国五大学学生競技大会で、佐々尾若奈さん(地域学部地域政策学科4年生)が女子シングルスにおいて優勝し、見事4連覇を果たしました。また、女子団体戦でも、本学が優勝し、昨年の優勝に続き2連覇となりました。





読者アンケートにご協力いただいた方へ
プレゼントが当たる!

今後のよりよい誌面作りのために、皆様からのご意見やご要望をお待ちしています。アンケートにご協力いただいた方の中から抽選で6名様にプレゼントを進呈いたします。

学生広報スタッフにより、
パッケージデザインリニューアル! /



どちらかのデザインをプレゼント!

合計
6名様

アンケートのご回答はこちらから

プレゼント応募締切 | 12/28(木)

※ご記入いただいた個人情報はプレゼントの発送以外には使用いたしません。また、当選者の発表は、発送をもって代えさせていただきます。



大学からのお知らせ

INFORMATION

申込不要
受講料無料

サイエンス・アカデミーのご案内

日時 毎月第2・第4土曜日 10:30~12:00
会場 鳥取県立図書館 2階 大研修室 (鳥取市尚徳町101)
お問い合わせ 鳥取大学地域価値創造研究教育機構企画管理室

TEL 0857-31-6777

テーマ より地域に根ざし、貢献する大学へ

テーマ	講師
12/9 2017 [+] 新たな養殖技術による地域活性化	地域価値創造研究教育機構 准教授 清水 克彦
12/23 2017 [+] "天然・野生酵母"の科学 [天皇誕生日]	連合農学研究科 教授 児玉 基一朗
1/27 2018 [+] クロマグロの♂♀は見分けられるのか? -牛の獣医が境産産クロマグロの DNAを調べてみた-	農学部 助教 西村 亮
2/10 2018 [+] 地域住民と一緒に考えて開発した ため池の防災・減災システム	農学部 准教授 清水 克之

信頼と笑顔 地域に感謝 move your heart

鳥取銀行は、お客さまの明るい未来と活力あふれる地域を創造する銀行を目指します。

共生の里づくり支援事業	鳥取砂丘の清掃活動	鳥取大学「鳥取銀行講座」	ネーミングライツによる地域支援
			とりぎんバードスタジアム とりぎん文化会館

TOTTORI BANK 青い鳥の銀行です。鳥取銀行

風紋のバックナンバーは、こちらから
www.tottori-u.ac.jp/fumon

鳥取大学広報誌 検索

鳥取大学に関するお問い合わせ

■入学試験	0857-31-5061	■研究・産官学連携	0857-31-5608
■公開講座・社会貢献	0857-31-6777	■学生・学生生活	0857-31-5053
■授業料納入	0857-31-5029	■学生就職支援	0857-31-5456

その他はホームページ www.tottori-u.ac.jp/ask をご覧ください

編集発行 / 広報委員会 広報誌編集専門委員会

2017年11月発行

山下博樹 (委員長・地域学部) 筒井宏樹 (地域学部) 西村正広 (医学部) 塩崎一郎 (工学研究科)
遠藤常嘉 (農学部) 滝波稚子 (教育支援・国際交流推進機構) 山岸大輔 (産学連携推進機構) 西尾瀧雄 (総務課)

〒680-8550 鳥取県鳥取市湖山町南4-101 TEL.0857-31-5006 FAX.0857-31-5018
[E-メール] toridai-kouhou@ml.adm.tottori-u.ac.jp [ホームページ] <http://www.tottori-u.ac.jp>

*本誌掲載の写真、図版、記事などの無断複写・転載を禁じます。

表紙題字: 住川英明 (地域学部)

